

The Reminiscence of Exellia 蒼天のヴァルマーレ

氷晶、昇華

作成レギュレーション

基本概要

- ・経験点：260000 点
- ・資金：390000G
- ・名誉点：2100 点
- ・成長回数：361 回

制限事項

- ・放浪者／蛮族 PC 禁止
- ・バニラ流派入門・秘伝使用禁止
- ・武器防具強化に関する特殊制限
- ・シナリオ報酬成長回数が 10 以上のとき、その 6 割の偏重割り振りの禁止
- ・戦利品判定は振る

その他注意事項

- ・レベル制限逸脱 PC の Lv シンク
- ・ステータス制限逸脱 PC のステータス再振り分け
- ・成長回数制約逸脱時の強制デッドエンド

メモ群

光の加護の封印 解除順

原作（FF14）だと、氷→土→雷→風→水→炎。

一方 TReXLap2 だと、雷→水→土→氷→炎→風→氷。

導入

…アリヒロの『自害』から、数日後——

黒い空間に、黒い靄が浮かび上がる。そこから現れたのは、アリヒロだった。

彼は『祝福無き者』と取引して、番外の『祝福無き者』になっていた。

アリヒロ

「ぐはあっ…。ハア…！」

アリヒロは辺りを見渡し、首に手を当てる。

首は繋がっている。だが、繋がっている心地がしない。

だが、『死の恐怖』として、白黒になり反転した『あいつ』の姿が思い浮かぶ。

アリヒロ

「馬鹿馬鹿しい…。僕の律のほうが正しいに決まっているのに…。

自分の予測を過信しすぎた。もっと圧倒的な力の差をつけてから挑むべきだったんだ。

らしくもない…。『アウェア家の利権』に煽られでもしたか。まあいいさ、今後に活かすだけだ。次は必ず…。…どれだけの労力を払った計画だと思ってるんだよ。

畜生…！野生の律が見えていたというのに…！あの罪人風情が…ッ！」

悪態をつくアリヒロ。そこへ、『祝福無き者』の第四座、黒の剣士が訪れる。

黒の剣士

「やっぱり負けたんだ、アリヒロ」

アリヒロ

「ハア～…。僕の負けをもう嗅ぎつけてきたわけか。まったく鼻がいいことだ。

いいよ、報告はする。そういう決まりだからね。精々伝えてやれ、『天文術師』の面々に…」

<hr>

一方、白樺澄基地深層——

そこで、エクセリアは胎動の水球に身を預けていた。無論、身体全てを調べる必要があるため生まれたままの姿であったが、意識は起きた状態だった。そもそもの話、治癒目的ではないからだ。

エクセリア

『ねえ、今日はどういう目的でここに居させられるんだ？』

ジョセフ

「先日の一件で、お前さんの身体に不調が起こっていないかを確認したくてな…。

聞くに、お前はアリヒロの放った秘奥機術を弾き飛ばした。その膨大な魔力を以てしてな…。それが原因で、肉体の変動が起きていないかを確認しなきゃならんのだ」

言いながら端末を操作し、エクセリアの診察を進めるジョセフ。
そしてぴこん、という音と共に、結果が出る。

ジョセフ

「…お主、さてはケーシスとやったか？」

エクセリア

『うげっ』

ジョセフ

「着床しておるぞ。しかも 2 人。ノーブルヴァルキリーの妊娠は、普通の人間の 1.5 から 2.5 倍の期間かかる…。それは分かっていような？」

その事実を聞き、エクセリアは目を閉じる。

ジョセフ

「無茶はしないようにな。解放するぞ」

そう言って、胎動の水球が複数の小水球に分かれ、エクセリアが解放される。

服を着ながら、エクセリアは腹部を『存在定義を観る眼』で見る。

確かに、魂がふたつ、そこに宿っていることは分かった。

つまり、あの時の不調は、もしや…。その疑念を胸に、エクセリアはそこを後にした。

<hr>

——それからしばらくして。

君達の元に、エクセリアとジョセフが訪れる。

ジョセフ

「少しエクセリアを診察した。中々マズいことになっている故、お前達に共有しておかなければならないと思うてな」

(※GM メモ : RP 待機)

エクセリア

「…妊娠したんだよ、双子を。着床後の経過は順調だが…、ノーブルヴァルキリーと言う種族は、他の種族の妊娠と比較して長くてな。

今はまだつわり程度で済んでも、通常よりも長くキツい期間があるかもしれない」

(※GM ×モ : RP 待機)

エクセリアからの告白に、君達は多かれ少なかれ驚くだろう。ただ、君達の目を盗んでセリーヌという娘を宿してさえいた身だ、驚きについては、『それ』より少ないだろう。

(※GM ×モ : RP 待機)

エクセリア

「こういうのはなんだがな、私はまだ、成すべきことが残ってる」

そう言って、エクセリアは椅子に座り込む。ただため息について、床を見る。

ケーシス

「よう、エクセリア。あれから、どうなった？」

(※GM ×モ : RP 待機)

そこに、ミアキスの偉丈夫…ケーシスが現れる。

彼は、大剣で狩ってきたのであろう、大鹿をエミリアに引き渡す。

エミリア

「げえーっ！コイオス・エルク！？今日は鹿肉を飯にしようってのかア！？」

(※GM ×モ : RP 待機)

日常は、つつがなく続していく。

刻読みの旅路

君達は、そんな中、エメリーヌに呼び出されていた。

エメリーヌ

「すこし悩ましい話が舞い込んで来亭てね」

(※GM ×モ : RP 待機)

龍姫公

「私から説明しよう。どうにも、コミニテルンの動きが怪しくなってきた。コミニテルンの首魁、ディスエリィア労働者共和国が、超巨大飛空戦艦の建造を完了させ、初飛行に成功したらしい」

(※GM ×モ : RP 待機)

君達が詰め寄ると、龍姫公はまあ慌てんって、と言わんばかりの表情を浮かべる。

龍姫公

「昨日のことのようだ。新国家主席が動き出すのも、そう遠くはないということだろう。コミニテルンの脅威に対抗するための体制固め…、成さなければならぬようだ」

(※GM ×モ : RP 待機)

そう言って、龍姫公は調べられた限りの『飛空戦艦』の情報を提示する。

見識（セージ知識）判定 目標値：33

成功時、我々の世界にある架空兵器で喻えるならば「P-1112 アイガイオン」の兵装。
凡そ人に向かって使う者ではないようだ…。

(※GM ×モ : RP 待機)

龍姫公

「問題は…、こいつを飛行させている、ということだ。ヴァルマーレにはアーセナルバードがあるが、これのAPSを貫徹可能なレールガンを数基配備しているということ。

そして、これが飛行して戦闘を行う最初のターゲットが…」
エメリーヌ
「…フレイディア」

(※GM ×モ : RP 待機)

エメリーヌの答えに対し、龍姫公は首肯する。
龍姫公は、胸元のクリスタルに手を当てる。

龍姫公
「…この身に受けた血に誓って、私は龍刻を護りたい」
エクセリア
「だが、お前にはもう権力はないぞ。龍刻を守る戦力は出すが、如何せん…」
龍姫公
「妊婦は黙ってろ！」

(※GM ×モ : RP 待機)

唐突な罵声に、エクセリアも驚いたような表情を顕わにする。

龍姫公
「お、お前は身体を労れっての！権力がないのは百も承知だ！だから、この防衛の任務は全冒険者ギルドに流す！それでいいだろ！」
ケーシス
「…それで集まった奴らを肉壁にするのか？」

そう言って、ケーシスは龍姫公を睨み付ける。

(※GM ×モ : RP 待機)

龍姫公
「…肉壁にはしない。私も一応は大剣使いだ、相応に守る力はある。だから…」
ケーシス

「深いことは言わねえよ。だがな、はっきりと言っておくぜ。——傲慢になるな。お前は常に、そのようなことになりがちだ」

(※GM ×モ : RP 待機)

エメリーヌ

「あなた達は、『竜の巣』に向かってもらえる？彼らを撃退するわよ」

(※GM ×モ : RP 待機)

PC がエクセリアの妊娠について問い合わせていた場合

ケーシス

「ミ° ツ」

竜の巣へ

君達は、竜の巣へ向かった。

龍姫公が召喚した、スカーレッド・スーパーノヴァの上に乗る君達は、背後からフェルニゲシュが追い縋ってくるのを見ることになる。

彼が放った炎の吐息は、過たずスカーレッド・スーパーノヴァに直撃する。

しかし、スカーレッド・スーパーノヴァは落ちない。一切のふらつきなく、竜の巣のランディングポイントに辿り着く…。

(※GM ×モ : RP 待機)

コンテンツ解放：邪竜血戦 ドラゴンズエアリー [ALT]

歩いて行くと、真っ先に竜が襲いかかる。

敵：ドラン・ソーンガール×6、エアリー・ワイバーン×4

更に進むと、東洋竜のような姿のドラゴンが現れる。

敵：ランダ

君達はランダを倒した。

先へ進むと、崖がある。だが、うまく滑落すればノーダメージでやり過ごすことができそうだ。

軽業（スカウト or レンジャー運動）判定 目標値：33

成功時、無事に滑落することに成功する。

失敗時、「2d+90」点の確定ダメージ（最低1残る）。

なんとか先に進むと、更に竜が襲いかかってくる。

敵：エアリー・ドラゴネット×4、ドラン・ソーンガール×4

それらを退けながら先へ進むと、やはり竜が待ち構えていた。

(※GM ×モ：RP待機)

敵：フェルゲニック・レッサードラゴン

君達は、フェルゲニック・レッサードラゴンを討ち倒した。

更に進むと、竜たちが更に襲いかかってくる。

(※GM ×モ：RP待機)

敵：エアリー・ドラゴネット×4、ドラン・ソーンガール×4、エアリー・ブルーム×4

君達は、それらをも退けた。

(※GM ×モ：RP待機)

奥に、邪竜の気配を感じる。

攻め込むと、そこには邪竜フェルニゲシュがいた。

敵：フェルニゲシュ

フェルニゲシュ打倒

君達はフェルニゲシュを討ち倒した。

起き上がり、咆哮して噛みつこうとするフェルニゲシュを、ヴォルフラムが竜の眼で牽制する。

(※GM ×モ : RP 待機)

フェルニゲシュ

『我が眼の力にて、我自身を縛るなど…どこまでも薄汚い真似をッ！

覚えておるぞ、穢れた蒼き竜騎士よ！一度は我が力に魅入られし者め…この先に待つ運命も知らずに！』

(※GM ×モ : RP 待機)

竜の眼をしまい、槍を向けるヴォルフラム。

ヴォルフラム

「この俺が、逃がすと思うのかッ！！」

飛び上がり、フェルニゲシュに槍を刺す。そして、がっつりと竜の眼を抜き取り、残骸は散っていく。

ヴォルフラム

「数千年もの間、人が味わった絶望だ…。光見えぬ死の底で、永遠に苦しむがいい！」

そのとき、君達に変調が起こる。

雷、水、土…。封じられた光の加護が、揺らいだのだ。

(※GM ×モ : RP 待機)

しかし揺らいだだけで、解かれることはなかった。

ヴォルフラム

「おい、大丈夫か！？」

(※GM × モ : RP 待機)

ヴォルフラム

「…光の加護…？封印…？一体全体どういうことだ！？」

君達は、色々と離した。

(※GM × モ : RP 待機)

ヴォルフラム

「ヴァルマーレに伝わる建国神話によれば、俺達の遠い先祖は、神使に導かれこのヴァルマーレの地に辿り着いたという。その最中、深い谷間でフェルニゲシュに襲われた父祖たちは、神使を筆頭に、果敢に戦いを挑んだ。この戦いで、神使の父は死したが、その息子にして神使の兄であり、史上初の『蒼の竜騎士』たる『ハルドラス』が、フェルニゲシュを倒した…。

伝説によれば、ハルドラスは奴を退けた際、その『片眼』を奪い取ったと伝えられている…。それこそが、ヴァルマーレ帝国の秘宝であり、歴代の蒼の竜騎士たちの力の源だった、この『竜の眼』だ。しかし、フェルニゲシュにはこの黄色の片眼だけが嵌っていて、フェルニゲシュの眼の色は『赤』と伝えられている…。

それが誠だとすれば、今まさに俺が奴から抜き取った、この『竜の眼』は一体…？」

そう言って、「黄色の竜の眼」を君達に渡すヴォルフラム。

ヴォルフラム

「…どうやら、俺達には、まだ知らない秘密があるようだ」

君達は、その場をあとにする…。

聖竜への返還

ウィルムフロア雲海にて、君達は互いをたたえ合った。

(※GM × モ : RP 待機)

ヴォルフラム

「激戦だったが、よくぞ戦い抜いてくれた。

流石は光の戦士…、共に戦うことができたことを誇りに思う。漸くフェルニゲシュを倒したのだ、すぐにでも帝都に帰還したいところだが…、フレースヴェルグの元に行こう。

隠された過去を知るためにも、奴に確かめなければならんことがある」

そう言って、君達に同意を求めるヴォルフラム。

(※GM ×モ : RP 待機)

ヴォルフラムは、『白亜の宮殿』に向かった。

道中の危険は特にない。

<hr>

君達は、フレースヴェルグのもとに辿り着いた。

丁度よく、セルマもそこにいた。

…というか、フレースヴェルグが露骨にしょぼんとしている。セルマが号泣していることからも、なにかしでかしたのだろうか…？

(※GM ×モ : RP 待機)

セルマ

「ひっぐ…。やはり…あなたたちだったのね。竜たちの悲痛な鳴き声が聞こえたわ…。

邪竜『フェルニゲシュ』を殺したうえ、これ以上、なんの望みがあると言うの！？悲しみに暮れる聖竜の暮らしを、もう荒立てないで！」

ヴォルフラム

「黙れ、氷女！俺達は、フレースヴェルグと話しに来ただけだ。いや、違うな…、土産物を届けに来たんだ。そして、隠された真実を語らせる。

セルマよ、お前も仲間を率いて『千年戦争』に加わった身だろう。ならば、争いの根源について知るべきだ。…真の意味で、千年戦争を終結させるためにな」

(※GM ×モ : RP 待機)

フレースヴェルグ

『…愚かな。やはり刃により、禍根を断つ道を選んだか…、人の子よ。フェルニゲシュの力が失われるのを感じたぞ…』

(※GM ×モ : RP待機)

君達が「黄色の竜の眼」を齧ると、それがフレースヴェルグの左目に吸い込まれ、固着する。

フレースヴェルグ

『…真実に辿り着いたか…。その「竜の眼」こそ、遙か過去にフェルニゲシュに譲った、我が力の源なのだ…。返却に感謝する』

(※GM ×モ : RP待機)

そのとき、過去を見る。

フェルニゲシュの嘆き～フレースヴェルグ視点～

フレースヴェルグ級の巨竜が、天より落下してくる。

なんとか体勢を立て直したその巨竜、フェルニゲシュは、フレースヴェルグを見る。

フレースヴェルグ

「一体どうしたというのだ…、我らの家族、フェルニゲシュよ」

フェルニゲシュ

「姑息なヒト共にしてやられた…！奴らめ、我が妻の眼を喰らい、力を…！」

そう言って、地団駄を踏むフェルニゲシュ。

フェルニゲシュ

「なんということだ…。人とは、かくもおぞましい裏切りを成すというのか！」

ニーズヘッグ

「待て、フレースヴェルグ！確かにヒトは信用するなと言った、だがそれは…お前を想うことだ！この程度で悲嘆に暮れるな！」

と言う、どことなく CV：勇者王な雰囲気を漂わせるニーズヘッグ。

しかしフレースヴェルグを支配していたのは…衝撃だった。

駄々をこねるフェルニゲシュの両眼がないのだ。

フェルニゲシュ

「ヒトの小娘如きに誑かされた貴様が、『融和』など説かなければ、我が妻が殺されるこ
とも、我が双眸が奪われることも…！」

ニーズヘッグ

「いい加減にしろ、フェルニゲシュ！この程度で復讐を考えようとするな！

それとフレースヴェルグ。悲嘆に暮れているところ悪いが…、このままだとマズい。応
急処置もかねて、その竜の眼の片方をやってはくれんか！？」

ニーズヘッグの指示に従い、フレースヴェルグは片眼をフェルニゲシュに渡す。

<hr>

フレースヴェルグ

『…どうやら、我が過去を覗き視たようだな』

セルマ

「なんてことなの…。フェルニゲシュの残された『眼』が、あなたのものだったなんて
…」

(※GM × モ：RP 待機)

君達は、これを前提に考えなければならない。このとき判定は不問とする。

※んゅ～？など、思考放棄がなされた場合は後ろでニーズヘッグがキれます。

ニーズヘッグ

「しっかり考えろアホ！」（※交易共通語）

「んゅー、じゃない！考えろ馬鹿！」（※同じく交易共通語）

『少しばかり考えることぐらいお前らも学んでいるだろうが！？！？！？』（※所々交易共通
語が混じっているが、テレパシーを使っているのでドラゴン語）

(※GM × モ : RP 待機)

ヴォルフラム

「ハルドラスと騎士たちの唯一の誤算は、双眸を奪われて尚、フェルニゲシュが生きていたということか」

フレースヴェルグ

『瀕死の傷を負いながら、フェルニゲシュは逃れてきた。そして我に対し、片眼を差し出すよう求めたのだ。人に復讐を成すための力としてな…』

(※GM × モ : RP 待機)

そう言って、彼はセルマの弾劾を…「片眼を与えることがあなたにとっての贖罪だったのか」というものを聞き流した。

ニーズヘッグ

『…小娘よ、よく聞け。あくまで自癒を促し、新たに眼が生えてくることを期待してのことだ…。断じて、復讐を成させるためのことではない』

(※GM × モ : RP 待機)

ニーズヘッグ

『奴はやんちゃが過ぎた。ある種天罰と言っても差し支えないと言えるだろう。眷族が殺されたのは確かに痛い出費だが…、永久に戦争を続けさせる奴の思想には考へるべきことがあると言えるだろう。…分かったな、竜にとって、これは今の出来事なのだ…』

フレースヴェルグ

『我が愛する者が望んだ調和は、彼女と同族である人の、穢らわしき裏切りにより潰えた…。それにより、眷族として血を分けたフェルニゲシュの妻を喪い、フェルニゲシュは狂気の底に追い落とされた。…これ以上、人が我に何を言わんとするのか…』

(※GM × モ : RP 待機)

悲嘆は終わりを知らず、フレースヴェルグはただ嘆くように君達を見ていた。

(※GM × モ : RP 待機)

フレースヴェルグ

『去れ、人の子らよ…。人の飽くなき欲望が、我らに不幸を齎した。今、お主らを殺めぬのは、愛するシヴァの最後の願いがあればこそ…。それをゆめゆめ、忘れぬことだ』

そう言って、フレースヴェルグは飛び去る。

(※GM ×モ : RP 待機)

ニーズヘッグが、困ったような表情を浮かべていた。

ニーズヘッグ

「…許せとは言わぬ。フェルニゲシュにもまた、譲れない何かがあったのだ。我には、父祖でありながら、察せぬがな…」

そう人語で呟くニーズヘッグを、君達は眺めていた。

ヴォルフラム

「悲願だったフェルニゲシュを仕留めたっていうのに、これほど気分が悪くなるとはな」

セルマ

「あなた達は、怒りと怨みの化身と化した、フェルニゲシュを殺すことで、戦いに終止符を打った…」

ヴォルフラム

「俺も生まれ故郷と家族をフェルニゲシュに焼かれた。復讐のために槍を取り、怨みを晴らすために戦ってきた。…ある意味、俺とフェルニゲシュは似た者同士だ」

(※GM ×モ : RP 待機)

ヴォルフラム

「しかし、まだ分からぬことがある。フェルニゲシュの片眼は、フレースヴェルグのものだった。一方で俺の持つ『眼』が、フェルニゲシュ本来のものなのも確かだ。

…では、奴のもう一つの『眼』はどこにある？さらに『竜詩戦争』を永劫に続け、裏切りを行った人に対して、終わらない責め苦を味わわせようとしていた奴が、帝都を攻め、決着をつけようとしていたのはなぜだ？」

(※GM ×モ : RP 待機)

そのとき、通信が入る。

ヴォルフラム

「ミシガンか。…ああ、終わったぞ。フェルニゲシュは墮ちた。…何ッ？」

帝都が危ないだと！？一体どういうことだ！…分かった、すぐに戻る。なんとか、持ちこたえてくれよ。

——帝都で大規模な騒乱が発生した。詳しくは不明だが…等護の上空を、巨大な空中戦艦が漂っているらしい…！」

(※GM ×モ : RP 待機)

ヴォルフラム

「竜との戦争が終わろうとしているのに、今度は人同士が争いを続けようとしている。人は、因果な生き物だな…」

疲弊したように、ヴォルフラムは言う。

ヴァルマーレ—ディスエリィア戦争

一方——

昌三

「『下層民の一部』が、帝都にディスエリィアの手の者を呼び込んだようです。ですが、ご安心ください。ドラゴン族の襲来に備え、帝都には多数の兵力が、駐屯しておりますれば、鎮圧も時間の問題かと…」

有仁

「予定通りに、事が運んでるようだな」

昌三

「ハッ…。帝都での戦を見れば、心ある良民たちは、より強くドラゴン族を恐れることになりましょう」

有仁

「そして我らに、より強く救いを求めるか…。」

よかろう、ディスエリィアを適度に暴れさせた後、頃合いを見計らって、神道衛士団に力を貸し、鎮圧せよ」

昌三

「御意…」

蒼天騎士団を退席させる有仁。その背後に、黒の剣士が現れる。

黒の剣士

「…動くのかい？」

それを聞き、顔を上げる有仁。

黒の剣士

「いいだろう。間もなく、全ての準備が整うよ。…今こそ、光の使徒を消すときか」

戦火の等護

戦火に包まれた等護で、君達はトーレスと合流する。

トーレスは君達を見てにやりとするも、背後の女性…セルマを見てやや困惑する。

それに対し、ヴォルフラムはアイコンタクトで何かを伝える。

(※GM ×モ：RP待機)

大体事情を察したのか、トーレスは君達と合流し、街を駆ける。

トーレス

「あそこだ！」

トーレスは、君達を連れ、ディスエリィアの軍勢と、神道衛士団および異端者の吳越同舟的な軍勢の間に割って入った。

異端者

「氷の巫女様！」

「セルマ様！」

セルマ

「詳しい事情は後だ！なぜ、お前達がいる…ディスエリィア！」

(※GM ×モ : RP 待機)

ディスエリィアの軍勢は、セルマを見て嘲笑う。

ディスエリィアの軍勢

「そう言うも何も、竜詩戦争で疲弊しているところを攻め立てるのが、我々の目的だ」

ヴォルフラム

「…蛮族が…！」

(※GM ×モ : RP 待機)

ディスエリィアの軍勢

「もういい。殺せ」

この戦闘では、「マティアス・トーレス」「氷の巫女セルマ」「屠龍のヴォルフラム」も参加します。

敵：ディスエリィアの軍勢×12

君達は、ディスエリィアの軍勢を退けた。

ディスエリィアの軍勢

「冒険者め…！我らの国交に介入するか…！」

そう言って、ディスエリィアの軍勢は信号弾を打ち上げる。

撤退を意味するそれは、街にいるディスエリィアの軍勢を全て、迅速に撤退させた。

トーレス

「ひとまずは収まったようだな。

色々と聞きたいことはあるが…、まずは感謝するぞ、友よ」

(※GM ×モ : RP 待機)

ミシガンの決意

君達は、ひと呼吸おいてからトーレスに話しかける。

トーレス

「それにしても、友よ。『氷の巫女』を連れて来るとは驚いたぞ。異端者が…彼らが我らとともにディスエリィアの軍勢を退ける助力をしていたのにも驚いたが、一体何があったというのだ？」

(※GM × モ：RP 待機)

トーレス

「なんと…イゼルとともにウィルムフロア雲海へ！？ヴォルフラム殿と動いているとは聞いていたが…。

ともあれ、邪竜『フェルニゲシュ』を退けたこと、そしてディスエリィアの軍勢を退けたことは、朗報と言つていい。シンファクシ伯爵や、ミシガン卿に報告せねば…！」

ヴォルフラム

「ミシガンたちには、俺から連絡を入れておこう。『シンファクシ家の屋敷』に集まるよう手はずを整えても？」

トーレス

「それでは、光の戦士よ。『エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵』のもとへ行こう！」

そう言って、トーレスとヴォルフラムはその場を後にする。

(※GM × モ：RP 待機)

君達は、シンファクシ家の屋敷に到着した。

そこには、エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵のほか、ミシガン総長、ラスティ、ヴォルフラムに…、エクセリアもいた。

エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵

「無事だったか！」

トーレス

「父上！蒼の竜騎士殿と、我が盟友のおかげであります！彼らから齎された、喜ぶべき報せをお聞きください」

(※GM ×モ : RP 待機)

エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵

「なんと、異端者どもの頭目、『氷の巫女』を帝都に連れ帰るとは…。いやはや、驚くべきことを…」

ラスティ

「…ケーシスが持って来たオーバードウェポンを使えなかったのは残念だ…」

ミシガン

「異端審問官どもは、いい顔をしねえだろうが…、被害を最小限に留めることができたのは、喜ぶべきことだろう。感謝するぞ、冒険者」

(※GM ×モ : RP 待機)

エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵

「邪龍を討ったとなれば、正教の方々も、功績を認めざるを得ないでしょうね」

シンファクシ伯爵の発言に対し、ミシガンは頷く。

エクセリア

「…問題は、フレースヴェルグとの邂逅で明るみとなった、『竜詩戦争』の発端と、その顛末でしょう。『ヴァルマーレ建国神話』を根底から覆す事実を、どうするのか…」

(※GM ×モ : RP 待機)

ミシガン

「嘗て人と竜とが共に生きた時代があり、人の欲と裏切りが、争いを引き起こした、か。

まあそういうものだろうよ、人というのは」

エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵

「我ら四大官家が『官家』という立場にある理由…。その点にも、疑問符がつくことになりますな。

邪龍を退けし十二騎士の末裔であることは揺るぎませぬが、爵位を捨てた者達がいたとなれば、平民もまた、十二騎士の末裔ということになる…」

エクセリア

「…事実、平民出身の異端者の中には、『竜の血』の力で、ドラゴンの眷族となる者がいました。『眼』を喰らった者の末裔という、何よりの証拠となります」

(※GM ×モ : RP 待機)

ミシガン

「この真実を、歴代の天皇陛下はご存知だったのだろうか？だとすれば、その罪はあまりにも重い。このままにしておくわけにはいかないようだな」

(※GM ×モ : RP 待機)

ミシガンの考えた内容を、シンファクシ伯爵はすぐに理解し、待ったをかける。

エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵

「お待ちください、ミシガン卿。天皇陛下を直接詰問なさるおつもりか！？」

トレス

「無茶だ総長、よせ！たとえ天皇陛下が『真実』を知っていたとしても、認めるはずがない！」

エクセリア

「逆に、あなたが異端に墮ちたと、告発されかねない内容だぞ？それでもいいのか、ミシガン卿？」

(※GM ×モ : RP 待機)

説得を試みる一行だったが、しかしミシガンの決意は揺るがない。

ミシガン

「そうなることを狙ってのことだよ、冒険者。長きに渡るこの戦争を、真に終結させるためには、『真実』を白日の下に晒さねばならん。

見たであろう、先ほどの光景を。多くの民が戦いに疲れ、信じるものを見失っている様を。…次は、人同士の争いで血が流れるぞ。邪竜の眷族という共通の敵を失えば、支配する者と、される者の間での戦いが起こるだろう。セルマが『真実』を知った今、どんなに宮内庁が否定しようとも、噂の流布は止められない…。

そして、噂は不満を持つ者達を束ねる力になるのさ」

(※GM × モ : RP 待機)

そう言って、ミシガンは外へ出る。

「一発、奴を殴ってくる」と、言い残して。

ラスティ

「ミシガン…」

エクセリア

「V.IV…。本当に、ミシガン卿を行かせてしまつていいのですか？

言葉はアレでしたが、言うなれば『変革すべし』ということ。彼の見解に異論はないが、何の準備もなく、宮内庁に乗り込むというのは、あまりにも性急すぎるように思えるのです」

ラスティ

「確かに、止めるべきだったのだろう。だが、あれがミシガンだ。今俺達が成すべきことは、ミシガンを止めるのではなく、彼が歩む道を支え、助けること…。喻えそれが、宮内庁を対立する結末になろうとも」

エクセリアが驚いた様子で、彼を見る。

(※GM × モ : RP 待機)

ラスティ

「刻限を定め、ミシガンが戻らぬようなら、ヴァルマーレ宮内庁に突入する」

エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵

「なんと無謀な！一步間違えれば、帝都全体を敵に回すことになりかねん！」

ラスティ

「俺はミシガンと対等な関係にある。生粋のヴァルマーレ人ではない俺にとって、彼こそが俺の真の友なのです。それに、ミシガンの出自についての噂も、卿らはご存知ではないのですか？」

(※GM × モ : RP 待機)

ヴォルフラム

「…フン、くだらん」

そう言って、ヴォルフラムは腕を組む。

ラスティ

「ミシガンは、現天皇の従兄弟に当たる者…、という噂だ。

ヴァルマーレ神道において、天皇の血筋は分岐した場合、長男がその座を継ぐことになっている。だから公的には、天皇の父、先代に兄弟はない。しかし、それがミシガンの人生に、どれだけの暗い影を落としてきたことか…。

穢れた子と忌み嫌われ、喰え功績を立てようと、七光りと蔑まれる。今の地位に辿り着けたことさえ奇跡的だ。…だが、今回ばかりは、その血が有利に働く。如何に天皇とて、従兄弟を簡単には殺せないだろう。対立したとて、必ず助け出すだけの時間的猶予があるはずだ」

ヴォルフラム

「俺も行こう。俺にとって奴は、誰の子であろうと友に変わりはない。それに、宮内庁に楯突くのは、俺の方が先達なのでな」

(※GM メモ : RP 待機)

トーレス

「ミシガン卿は、新しき世を作るに相応しき者。俺もまた、微力ながら力を貸す！」

エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵

「マ、マティアス…お前まで…」

トーレス

「父上。友が難しい目標を照準してぶち抜こうとしているのです。それを手伝わずして何が艦長か…！何がシンファクシ家か…！俺は止められても前に進む…！ただそれだけだ」

(※GM メモ : RP 待機)

エイドリアン・ド・シンファクシ伯爵

「ぬう、英雄殿まで…。まったく、揃いも揃って向こう見ずな者達だ…。仕方あるまい、覚悟を決めるか」

ラスティ

「感謝を…」

報酬

基本要素

- ・経験点：20000 点
- ・資金：25000G
- ・名誉点：なし
- ・成長回数：9 回

Ascension

——数時間後。

疑似氷神シヴァを降ろしたリーンと、半顕現状態のエクセリアが、共に宮内庁の前に並んでいた。

エクセリア

「行くぞ」

彼女の合図に頷いたリーンは、顕現したコズミック・キューサーと『合体』する。

不死鳥の鳴き声のような、甲高い音と共に、その姿を変えた『疑似氷神シヴァ』は、目の前に来た衛士たちに対して暴れはじめる。

リーン

『邪魔をするなア！』

そして、陽動が始まった。